

 <p>写真提供：桜井市教育委員会</p>	<p><b>1 チャバネゴキブリ破片</b>  <small>まきむく</small>        纏向遺跡（奈良県桜井市）        古墳時代前期 桜井市教育委員会蔵</p> <p>女王卑弥呼の都との説もある纏向遺跡の3世紀後半の土坑より出土した、世界最古のチャバネゴキブリの破片。従来アフリカ北東部原産で日本には江戸時代末期頃に入ってきた外来種とされていた本種だが、2023年のこの発見により日本原産の可能性が指摘されるようになった。卑弥呼の跡を継いだと与が女王であった時期に当たり、その頃から貯蔵食糧などを狙う害虫としてチャバネゴキブリが人家に出没していたことを示す資料でもある。</p>
 <p>写真提供：京都大学総合博物館</p>	<p><b>2 絵画土器(高床建物に昇る2人の人物)【国指定重要文化財】</b>  <small>からこ かき</small>        唐古・鍵遺跡（奈良県磯城郡田原本町）        弥生時代中期 京都大学総合博物館蔵</p> <p>壺の破片に高床建物と、そこに梯子をかけて昇る2人の人物が描かれている。高床建物は弥生時代の絵画土器によく登場するモチーフで、収穫した米や種籾を貯蔵する倉庫として使われたことから、豊作を願う絵と考えられている。高床倉庫は害虫・ネズミ・カビ等による被害を防ぐため、密閉性の高い板材で造られ床が高い位置にある。しかし建物自体が出土することはほぼないため、絵画土器はその実態を伝える貴重な資料である。</p>
  <p>絹片部分 40倍拡大</p> <p>写真提供：福岡市博物館</p>	<p><b>3 細形銅戈(絹片附着)【福岡市指定文化財】</b>  <small>ほそがたどうか</small>        有田遺跡（福岡県福岡市）        弥生時代前期末～中期初頭 福岡市博物館蔵</p> <p>養蚕は稲作農耕に伴って弥生時代に大陸から日本に伝わったとされるが、弥生時代の絹は、北部九州で甕棺墓から小さな繊維片が出土した例しか知られていない。この銅戈は日本で青銅器が広まり始めた最初期に朝鮮半島からもたらされたもので、絹の繊維片が青銅のサビに包まれ銅戈本体に附着した状態で出土した。そのため貴重な青銅器を甕棺墓に副葬する際、同じく貴重な絹布で包む習慣があったと考えられている。織り方から日本製と考えられ、より古い墓から絹が出土した例がないことから、この絹片が現在知られる最古の日本製絹織物に当たる。</p>
 <p>写真提供：佐賀県文化課文化財保護・活用室</p>	<p><b>4 ゴホウラ製貝輪(絹片附着)</b>        吉野ヶ里遺跡（佐賀県神埼郡吉野ヶ里町）        弥生時代中期 佐賀県文化課文化財保護・活用室蔵</p> <p>甕棺墓から出土した副葬品の1つで、沖縄のサンゴ礁の海に棲息するゴホウラ貝で作られた腕輪に、服の一部と考えられる絹片が附着したもの。吉野ヶ里遺跡では養蚕が行われていたとされており、この絹片も、現地で生産されたものと考えられている。特筆すべきは、この絹片から貝紫の成分が検出されたことで、これにより高貴な身分の人物は貝紫染を施した紫色の絹の服を着ていたことが分かった。</p>
 <p>写真提供：桜井市教育委員会</p>	<p><b>5 巾着状絹製品</b>        纏向遺跡（奈良県桜井市）        古墳時代前期 桜井市教育委員会蔵</p> <p>3世紀末頃の溝から出土した小さな絹の巾着で、全体が漆でコーティングされていたため、奇跡的にほぼ完全な形で残ったもの。口は麻紐で縛られ、CTとMRIによる調査により、正体は不明ながら中身や空気が中に残されたままであることが分かっている。科学分析により、この絹はカイコの糸ではなく野生のヤママユ(学名 <i>Antheraea yamamai</i>) の糸であることも判明しており、多様な絹糸が織物に利用されていたことを示す資料でもある。</p>